

2019年1月13日（日）「まことの権威」

マタイ 21:23-27

23 それから、イエスが宮に入って、教えておられると、祭司長、民の長老たちが、みもとに来て言った。「何の権威によって、これらのことをしておられるのですか。だれが、あなたにその権威を授けたのですか。」 24 イエスは答えて、こう言われた。「わたしも一言あなたがたに尋ねましょう。もし、あなたがたが答えるなら、わたしも何の権威によって、これらのことをしているかを話しましょう。 25 ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。天からですか。それとも人からですか。」すると、彼らはこう言いながら、互いに論じ合った。「もし、天から、と云えば、それならなぜ、彼を信じなかったか、と云うだろう。 26 しかし、もし、人から、と云えば、群衆がこわい。彼らはみな、ヨハネを預言者と認めているのだから。」 27 そこで、彼らはイエスに答えて、「わかりません」と言った。イエスもまた彼らにこう言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに話すまい。

【序論】

今日は「権威」という問題を扱います。私たちは日頃、様々な局面で「権威」というものを意識的または無意識的に感じ取りながら生きているはずです。親や教師の権威、識者や技術者に伴う権威、組織の上に立てられた人の権威、そして国家権力…。そもそも「権威」とは何か。「自発的に同意・服従を促すような能力や関係のこと」(Wikipedia)。権威が権威として認められる場合に服従が起こる。「他者に対して権威的であるためには、その両者がある種の価値体系、規範を共有していることを前提とする。その上で、その価値体系、規範における上位の人・地位・組織などが権威を帯びることになる」。つまり、「この人はあなたの先生です」「あなたはこの人の生徒です」と言った場合、そこには両者が共有する価値体系が生ずることになる。しかし、こうも言われます。「権威は必ずしも個人に付帯するわけではない。ある立場・地位のみが権威化され、そのポジションにおかれた個人そのものに権威がともなわない場合もある。いわゆる権威的な職種に携わる人が、その地位を象徴する制服やバッジを身につける限りは権威を行使できても、そうした装置をひとたび外せば権威が失われるのはその一例である」。人間の持つ権威には限界があるのです。それは、何であれ人が持つ権威とは後から「与えられたもの」だからです。今日はイエス・キリストの権威の源を探ってまいります。主イエスの在世中「イエスとは何者であるか」という問いがユダヤ社会全体を覆っていました。いや、この問題は今に至るまで続いていると言えるでしょう。

【本論】

本論 1. 何の権威によって

それから、イエスが宮に入って、教えておられると、祭司長、民の長老たちが、みもとに来て言った。「何の権威によって、これらのことをしておられるのですか。だれが、あなたにその権威を授けたのですか。」(21:23)

主イエスは安息日以外の日(「それから」とは火曜日)にもエルサレム神殿に足を運び、民衆に教えておられました。場所は「異邦人の庭」であったと思われます。そこは、教えるために公に使うにいい場所とされていたからです(使徒 2:46)。

そこにやって来たのは「祭司長、民の長老」という立場の人々。マルコ、ルカは「律法学者」も含めており、これらの人々はユダヤ教最高議会を構成する三つの権威筋でありますから、事態はかなり緊迫しています。主イエスのここ数日の一連の行動を見て、いよいよ危機感を募らせ、協議してやって来たと思われるからです。彼らは宗教的・社会的権威を帯びていたのでありますが、それは専門的な知識と教養、著名なラビによる按手といったことに基づくものであります。現代日本でも、弁護士・医師と聞きますと、その肩書きだけで一般人は黙ってしまうかも知れません。ユダヤ教の学者というのは、法に精通していた訳ですから、民衆は太刀打ちできるものではありませんでした。

「これらのこと」とは、基本的に主イエスが大っぴらに教えている状況を指していると思われますが、ロバの子に乗ってのエルサレム入城、宮清め、盲人や足萎えの癒し、子どもの賛美を受け入れたことなど、一切を包含する言葉でしょう。まるで「権威ある者のように」(7:29) 振舞っている。ガリラヤ出身の田舎者で、著名なラビに着いて学んだという肩書きもなく、家柄も貧しい。そんな一介の漢が専門家を超えるようなことを教えているのです。そして、民衆はその教えに聞き入っている。明らかに律法学者から教わる態度とは違う。民衆がそこに「権威」を認めているような雰囲気なのです。そうなりますと、既成の権威を帯びて生きてきた彼らにとっては面白くない。この越権行為をどうにかして止めなくてはならない。そんな危機感から御許にやって来たのです。

「何の権威によって」という問いは、イエスを追い詰めることを意図しています。「お前は正式にラビの認定を受けていないはずだ。もしそういう経歴があるなら述べてみよ。さもなくば、預言者だとも言うのか。まさかメシヤだと公言するのでもあるまいな。もし自分をメシヤだと言うのであれば、民衆を扇動した罪で帝国に訴えるぞ」。そんな脅しも含まれているでしょうか。いや、彼らは主イエスの著しい御業を見て、その権威の出所を悪魔に帰したことさえあったのです(12:24-27)。

本論 2. ヨハネとイエスの権威

彼らの悪意ある問いに対し、主イエスは逆に問い返します。

イエスは答えて、こう言われた。「わたしも一言あなたがたに尋ねましょう。もし、あなたがたが答えるなら、わたしも何の権威によって、これらのことをしているかを話しましょう。ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。天からですか。それとも人からですか。」

(21:24-25a)

主イエスは彼らの質問に対し、直接はお答えになりません。このような議論の仕方は、別にずるい訳ではなく、当時の通例だったのです。ここで主はバプテスマのヨハネを引き合いに出しておられます。「ヨハネのバプテスマ」とは、ヨハネが授けていた洗礼のこと、あるいは彼の宣教活動全体を指しているでしょう。ヨハネは人々に悔い改めのバプテスマを宣べ伝え、神の審きが目前に迫っていることを訴え続けた。多くの人々がその厳しくも胸に響くメッセージに心を打たれ、ヨルダン川で洗礼を受けました。そこにやって来た人々の中にはパリサイ人やサドカイ人もいたことが分かっています(3:7)。彼らに対し、ヨハネは辛辣な言葉を浴びせました。

しかし、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けに来るのを見たとき、ヨハネは彼らに言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で言うような考えではいけない。あなたがたに言うておくが、神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことができになるのです。斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。(3:7-10)

世の権力者、学者に対して、こんなモノの言い方ができた人はいなかったでしょう。ヨハネは彼らの内に悔い改めを見出すことができなかつたのです。彼らはヨハネの活動を偵察するために来たと思われます。この漢のやっていることは何に基づくのか。なぜこんなにも民衆に人気があるのか。この時にも、彼らはヨハネの権威の源を問題としていたのです。

主イエスがここでヨハネを引き合いに出しておられるのは、彼らの問いとは関係のない「ごまかし」による逃避ではありません。ヨハネの権威とご自分の権威とが深く結びついたものであるゆえ、この問いは彼らの問いへの回答そのものとも言えるのです。ヨハネの権威が天からのものであったとするなら、主イエスの権威とはそれ以上に天からのものであったのです。ヨハネは生まれる前から神によって聖別され、祭司である父ザカリヤの預言の下に成長していきました。

さて父ザカリヤは、聖霊に満たされて、預言して言った。「ほめたたえよ。イスラエルの神である主を。主はその民を顧みて、贖いをなし、救いの角を、われらのために、しもベダビデの家に立てられた。古くから、その聖なる預言者たちの口を通して、主が話して下さったとおりに。この救いはわれらの敵からの、すべてわれらを憎む者の手からの救いである。主はわれらの父祖たちにあわれみを施し、その聖なる契約を、われらの父アブラハムに誓われた誓いを覚えて、われらを敵の手から救い出し、われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、恐れなく、主の御前に仕えることを許される。- 幼子よ。あなたもまた、いと高き方の預言者と呼ばれよう。主の御前に先立って行き、その道を備え、神の民に、罪の赦しによる救いの知識を与えるためである。これはわれらの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、日の出がいと高き所からわれらを訪れ、暗黒と死の陰にすわる者たちを照らし、われらの足を平和の道に導く。」(ルカ1:67-79)

ヨハネにはこれほどの天的權威が授けられたにも拘らず、彼自身も自覚しているように、彼はメシヤの先がけ、道備えをする役割を果たすに過ぎませんでした。

私は、あなたがたが悔い改めるために、水のバプテスマを授けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力のある方です。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。(マタイ 3:11)

ヨハネは主イエスをまさしく「聖霊と火とのバプテスマを授ける」神の子と認めていたのです。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ 1:29)。ですから、ヨハネを天来の人と認めることは、彼の証言するイエスこそ来たるべきメシヤだと認めることになる。そのような意味を込めて、主は權威筋の人々に問い返されたのです。ですから、これは問いであると同時に答えなのです。

本論 3. 眞の權威者を捨てる人々

すると、彼らはこう言いながら、互いに論じ合った。「もし、天から、と言えば、それならなぜ、彼を信じなかったか、と言うだろう。しかし、もし、人から、と言えば、群衆がこわい。彼らはみな、ヨハネを預言者と認めているのだから。」(21:25b-26)

權威筋の人々のヨハネ観とはどういうものだったのでしょうか。明確には書かれていませんが、世の權威ある者に向かってさえ憚らず「まむしのすえよ」と糾弾するヨハネとは、目障りな存在だったに違いありません。ヨハネも学者としての道は歩みませんでした。にも拘らず、その預言者としての力強いメッセージは民衆の心を捉えてやまなかったのです。人は基本的に学識ある人に信頼を寄せるでしょう。しかし、神の国のメッセージ

は学問のない人によって宣べ伝えられることがある。その人を突き動かしているお方が神であるならば、人はいかなる知識をもってしても太刀打ちできないでしょう。権威筋の人々も内心そのことを認めながら、もしヨハネを公に認めてしまったら自分たちの立場が揺るがされることを恐れて、へりくだることができませんでした。「天から」と喉まで出かかりながら、言葉に出すことができない。しかし、民衆がヨハネを預言者だと認めている以上、「人から」とも言えない。それは、真に神から出た者を彼らは見極めることができなかつたと、「靈的無能」のレッテルを貼られる可能性があったからです。人は世の評価を恐れるのです。

そこで、彼らはイエスに答えて、「わかりません」と言った。(21:27a)

これは本当に分からなかつたのではありません。どうしたら自分たちの評判が落ちないかということ仲間内で話し合った上で出した結論なのです。彼らは主イエスの切り返しによって窮地に追いやられてしまった。では、彼らは本当はどうすべきだったのでしょうか。これは彼らにとって悔い改めるチャンスだったのです。主は意地悪でこういうことを言われたわけではありません。今まで天来の者を認めず、ヨハネの言葉にもイエスの言葉にも耳を傾けることのなかつた彼らに、もう一度悔い改めのチャンスをお与えになった。しかし、知識は時に福音を受け入れにくくします。主イエスに対抗するような思いを持って近くなれば、その御言葉を理解することはできないでしょう。プライドは救いを妨げるのです。

彼らの「わかりません」という答えは、言い換えるならば「俺たちはヨハネを認めない」「お前のことも認めない」という結論なのです。主イエスは彼らの心を開こうとされた。悟りを与えようとされた。しかし、かえって彼らは心を閉ざしてしまつたのです。これは主イエスを拒絶したことを意味する。そして、その拒絶の結末こそ十字架なのです。

「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに話すまい。」

(21:27b)

この「権威問答」は、両者が決定的に袂を分かつ形で終わりました。しかし、拒絶にはお決まりの順序があります。まず人が神を拒絶し、神の許を去るのです。これはいつの時代でも同じです。神が人を捨てるわけではありません。アダムとエバは罪を犯し、神の目を避けました(創世記 3:8)。カインも弟を殺し、自ら神の許を去りました(創世記 4:16)。私たちも自分の罪を認めないでいる時、神を拒絶しているでしょう。それは救われた今も尚、何らかの形でやっていることです。しかし、主はそのような私たちの心を開いて、悔い改めに導こうとしておられます。

【結論】

私たちはもう一度、自分の心を見つめ直したい。この人生で神の主権を認めていないところがないか。これだけは神に従いたくないと思っていることはないか。それは、誰かと和解することかも知れません。あるいは、罪と結びついた習慣を捨てることかも知れません。自分だけがそれを知っています。主イエスは私たちを審こうとしているのではなく、罪から解放し、重荷を一緒に負ってくださろうとしているのです。救い主イエスの権威を認め、「主よ、私を造り変えてください」と祈ろうではありませんか。

【祈り】

全知全能なる神よ。あなたは私たちの心の奥底までをご存知です。私たちが自分でも気づいていないことさえ、あなたは知っておられます。もし私たちの内にあなたの御心に逆らう何がしかの思い、障害がありましたら、それを取り除けてください。主イエスに従えないようにしている要素がありましたら、それに気づかせてください。そして、聖霊の助けによって、あなたに従える者としてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
権威の源にして、すべてのものに従順を求め給う、父なる神の愛。
神より出でし者として、地に住む者の内に介入し給う、主イエス・キリストの恵み。
廃れゆく地上の権威に依らず、へりくだりをもって神に近づかせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。